

群馬県藤岡市白石大御堂遺跡における 中世埋葬遺構の検討

綿貫銳次郎・宮崎重雄・津金澤吉茂・飯島義雄

1 はじめに

群馬県下においては道路・鉄道建設等の大規模開発事業に伴う発掘調査の件数・面積の増大が著しく、各時代にわたる考古学的な新知見が多数得られている。中世においても城館跡・墳墓等の遺跡の調査機会が増え、溝跡・井戸跡・土坑・掘立柱建物跡等の遺構や陶磁器類・石造物類等などの遺物の出土例も多く見られるようになってきた。従来、この分野での研究は板碑を中心とする石造物類や骨蔵器としての陶磁器類などの出土遺物を中心としたものが多く、遺構や遺跡についてのものはそれに比して少ない。その理由として、中世の遺構を明瞭にとらえられる、言い換えれば中世面の保存状態が良好な遺跡の調査例が少なく、遺構と遺物との関係を示し得る資料が、出土する遺物量に比し少ないことが考えられる。

県西部で1985年から始まった上信越自動車道建設工事に伴う発掘調査では、ここに取り上げる白石大御堂遺跡の他、神保植松遺跡・内匠上之宿遺跡・中沢平賀界戸遺跡などで城館跡・屋敷跡・墳墓等の中・近世の時期の注目すべき遺構・遺物が見られ、その報告が待たれる。

筆者らは、群馬県藤岡市に所在する白石大御堂遺跡において火葬を主体とした中世埋葬遺構群の発掘調査に関わり、良好な資料を得ることができた。白石大御堂遺跡大御堂調査区で検出された埋葬遺構群は中世前半期の寺院址にその分布域がほぼ重複し、中世後半期を中心として形成されたものと考えられる。これらの埋葬遺構群は、その検出状況が多様で、しかも遺構群が寺院址にまとまって存在していることなど、中世墳墓の発掘資料として、また、寺院と墓地との関係を示唆する資料としても重要である。その報告書（綿貫他 1991）では中世寺院址に関しての部分に重点を置き、埋葬遺構群については遺構と出土遺物の基本的な報告で終わり、その詳細な分析や検討とそれを踏まえた埋葬遺構群の性格や位置付けについての考察はなされていない。中世の葬制については、宗教・政治・生活習慣等の多様な要素から追及しなければならない問題であり、同遺跡大御堂調査区検出の中世埋葬遺構群の考古学的検討は重要で意義あるものと考える。

本稿では、出土人骨の分析を通じて個々の遺構の性格をより詳細に分析し、出土人骨の遺存状況と遺構形態及び副葬遺物との関係、遺構間の関係、さらには寺院址と埋葬遺構群との関係などの分析を通して大御堂調査区の埋葬遺構群に見られる葬制の実態を明らかにしたい。

2 白石大御堂遺跡の概要と検出遺構

(1) 白石大御堂遺跡の概要と中世埋葬遺構の検出状況

白石大御堂遺跡は上信越自動車道（関越道上越線）の建設工事に伴い、1987年4月より1989年3月までの2カ年にわたって調査された。遺跡は路線長約800m（幅員約70m）と東西に細長く延びており、立地・時代・性格の異なる3つの調査区（大御堂調査区・前原調査区・上谷戸調査区）にまたがる。

中世の遺構・遺物は主に大御堂調査区で検出された。大御堂調査区は鮎川左岸の河岸段丘低位面にあり、西に隣接する前原調査区（洪積台地面・高位面）とは比高差3～5mの段差により隔てられる。標高105m～107mの北東方向に緩い傾斜が見られる平坦面で、調査前には水田として利用されており、遺構・遺物の包蔵は鮎川中下流域左岸では最も薄いと見られていたところである。鮎川崖より前原調査区との段差までは約250mの距離を隔てる。ここでは、「大御堂」の字名や「アミダイケ」の伝承などに寺院の存在を示唆する伝承があり、それを裏付けるかのように中世前半（鎌倉時代）の寺院址とそれにほぼ重複する範囲に営まれたと思われる埋葬関係の遺構群が、調査区の東半分にあたる鮎川崖より約100mの区域で発見された。埋葬遺構群は、概ね浅間A軽石層除去後の遺構面精査の段階で確認され、その下限を近世前半以前の時期として、また、浅間B軽石堆積後に構築された中世寺院址の遺構との重複から、上限は中世中頃の時期と考えられる。埋葬遺構群は幾つかに集中して分布する様子が認められ、それは先行する寺院址とも何らかの関係を示唆するよう思える。大御堂調査区の東半に於ける検出遺構は、中世前半の時期に属す寺院址遺構、これに後出する中世後半から近世中頃までの時間幅の中に収まると考えられる埋葬遺構群であり、近世後半以降はこれらの埋葬遺構群は埋もれ、その後は農地として利用され現在まで続いている。

(2) 中世埋葬遺構群の概要

大御堂調査区で検出された中世埋葬遺構の総数は31基で、遺構の分布とその形態的特徴、出土人骨・遺物等の状況及び焼土・炭化物等の残存状況等から、配石墓・火葬跡・火葬墓・土坑墓・土壙とに分類できる。（第1図、第1表、第2図～第6図参照）

- ① **配石墓** 方形区画の石敷き遺構から焼骨を収納した骨蔵器を出土する。寺院址の中央部に近い位置から1基検出された。
- ② **火葬跡** 平面形状は凸字形の長方形を呈し、壁面は赤褐色に焼けており、埋土下層に炭化物層が検出されている。基本的には焼骨が検出され、遺物の出土は見られない。寺院址西部と東部で11基が確認されている。
- ③ **火葬墓** 平面形状は長方形若しくは長楕円形を呈し、錢貨や皿形土師質土器等の副葬遺物を伴って焼骨が検出された。埋土中に炭化物が検出され、一部に壁・床面の焼土化も認められる。寺院址西部及び北西部で7基検出された。
- ④ **土坑墓** 平面形状は方形または隅丸方形で、寺院址中央部の一角で5基検出された。錢貨・皿形土師質土器等の副葬遺物を伴い、埋土中からは棺材と考えられる木質の確認がなされたものや円礫の出土するものも見られた。木棺直葬墓としての葬法が考えられる。



第1図 白石大御堂遺跡、大御堂調査区埋葬構造分布平面図

⑤ 土壙 円形の平面形状を呈し、壁はほぼ直に近い立ち上がりであり、底面は平坦である。出土遺物等は見られず、また、骨も検出されず墓としての明瞭な痕跡を確認ができず、その性格は不明である。しかし、同種遺構の報告例や本遺跡における検出状況・遺構形状・埋土等から、墓壙としての可能性が高いと推定し、他の土坑と区別するために土壙とした。本調査区内では5基確認され、寺院址中央部の一角に比較的近接して検出した。

上記遺構の他に、遺構に伴わない状態での人骨の検出（第8図版8）や、配石墓上面などに見られる小礫敷きと同様の小礫の分布も認められ、遺構として確認した以外にも同様の埋葬遺構の

第1表 白石大御堂遺跡大御堂調査区中世埋葬遺構一覧

遺構名稱	調査名	形狀	方位 N→Eへ	遺構規模(cm)				人骨 (g)	焼土 壁床	炭	出土遺物等 土器・錢貨	その他
				長径	短径	凸部	深さ					
大御堂第1号配石墓	1号配石	方形	107°	372	316	—	—	あり	—	—	—	方形基壇
	(主体部)	円形	—	40	—	—	25		○—	○	2	—骨藏器
大御堂第1号火葬跡	AK 5	長方形	16°	147	80	—	17	なし	○○	○	—	—
大御堂第2号火葬跡	AK 4	凸字形	13°	128	74	90	32	なし	○—	○	—	—
大御堂第3号火葬跡	AK 3	凸字形	20°	142	67	98	38	6	○—	○	—	—
大御堂第4号火葬跡	BK 7	凸字形	28°	110	60	84	32	971	○○	○	—	—
大御堂第5号火葬跡	BK 8	凸字形	11°	153	94	115	42	313	○○	○	—	—
大御堂第6号火葬跡	BK 8	凸字形?	11°	110	60	—	47	—	○—	○	—	—
大御堂第7号火葬跡	BK 9	凸字形	11°	104	55	92	44	905	○○	○	—	—
大御堂第8号火葬跡	BK 10	凸字形	2°	97	83	105	30	—	○—	○	—	—
大御堂第9号火葬跡	BK 12	凸字形	15°	151	80	113	52	1243	○—	○	—	—
大御堂第10号火葬跡	BK 14	凸字形	13	110	62	119	47	85	○—	○	—	—
大御堂第11号火葬跡	BK 15	凸字形	10	142	98	143	50	393	○—	○	—	—
			A 13.6°	A 126	A 73.9	A 106	A 39.2	S 3916				
大御堂第1号火葬墓	BK 11	長方形?	4°	128	73	—	52	580	○—	○	—	5
大御堂第2号火葬墓	BK 22	長楕円形	5	90	50	—	5	406	—	○	—	4:礫
大御堂第3号火葬墓	BK 23	長楕円形	2	152	36	—	6	181	○—	○	2	1:礫
大御堂第4号火葬墓	BK 24	長楕円形	12	80	25	—	3	125	—	○	—	5:礫
大御堂第5号火葬墓	BK 25	長楕円形	20	120	30	—	12	714	—○	○	2	9:鉄製品2
大御堂第6号火葬墓	BK 21	円形	—	60	—	—	3	—	—○	—	—	
			A 8.6°	A 110	A 35.3	—	A 6.5	S 2006				
大御堂第1号土坑墓	BK 13	長方形	18°	135	110	—	43	171	—	○	—	11:礫
大御堂第2号土坑墓	BK 31	隅円方形	23°	125	88	—	20	9	—	—	2	板碑・礫
大御堂第3号土坑墓	BK 32	方形	12°	107	85	—	52	—	—	—	3	6:礫
大御堂第4号土坑墓	BK 27	長方形	106°	174	92	—	48	—	—	—	—	平瓦・礫
大御堂第5号土坑墓	BK 28	長方形	107	162	93	—	14	—	—	—	—	鉄製品1
大御堂第6号土坑墓	BK 29	長方形	102°	115	62	—	90	—	—	—	—	鉄製品1
大御堂第7号土坑墓	BK 30	長方形	7°	130	20	—	20	—	—	—	—	
大御堂第8号土坑墓	BK 17	円形	—	132	110	—	52	—	—	—	—	礫
			A 135	A 90.8	—	A 42.4	S 180					
大御堂第1号土壤	AK 1	円形	—	82	—	—	28	—	—	—	—	—
大御堂第2号土壤	BK 4	円形	—	115	108	—	50	—	—	—	—	—
大御堂第3号土壤	BK 5	円形	—	88	78	—	50	—	—	—	—	—
大御堂第4号土壤	BK 6	円形	—	80	—	—	25	—	—	—	—	—
大御堂第5号土壤	BK 33	円形	—	70	—	—	不明	—	—	—	—	—
			A 87	—	—	A 30.6						

※ 表中の凡例は、○は顕著に認められる事例、○は確認できる事例、—は未確認・不明または計測不可の場合
Aは平均値、Sは合計値である。

存在したことも推定される。また、板碑・宝篋印塔・五輪塔等の石造物類も大御堂第1号濠跡の埋土中やその周辺など、埋葬遺構群の分布する近くで廃棄された状況で出土しており、両者の関係が注目される。

人骨が火熱を受けているかどうかを分類の基準とすれば、配石墓・火葬跡・火葬墓と、土坑墓・土壌とで基本的には区別でき、葬制上の大きな違いが認められる。遺存する人骨の分析と検討は埋葬遺構としての性格を明らかにするうえでは最も基本的な作業である。この結果と遺構そのものや埋土・出土遺物等の検討も併せて、葬制についての在り方や変化を論ずる必要があり、更には、遺構の分布や寺院址との関係も考慮されて、はじめて大御堂埋葬遺構群の性格と歴史的変遷が明らかとなる。

そこで、この16基の遺構から検出された人骨について、同定結果を以下に報告する。

3 埋葬遺構出土人骨の検討

(1) 出土人骨の分析の視点

出土人骨は、①火熱を受けているか否か、②遺存状況はどうか、③遺構内での個体数の確認、を分析の主眼とした。

大御堂調査区検出の埋葬遺構31基のうち人骨の出土が見られたものが16基ある。人骨は部位の確認できるものもあったが、大多数のものは骨片・骨粉に細片化して同定は困難であった。以下、各遺構毎に人骨の遺存状況の概要について報告する。(第2表、第1～第8図版参照)

(2) 出土人骨の同定結果

① 大御堂第1号配石墓 骨蔵器にはその2／3程度の高さにまで火熱を受けた骨が収納されていた。内容物は骨が主体で、その間隙は破碎化した骨と微粒子の土壌が埋めてやや固結した状態であった。当初は骨蔵器の口近くまで骨が収納されていたものと思われる。堆積層の上部表面には微粒子の薄い土の層が認められたが、浸透した雨水に含まれていた土壌が沈着したものと思われる。検出された骨には人骨としての特徴が認められ、人骨以外であると言える積極的な資料はなく、収納骨はすべて人骨と思われる。

保存不良な人骨の個体数を算出する場合、最も有効とされる部位の一つに岩様部がある。この岩様部が左右各1個づつしか検出されてないこと、他の部位や歯にも複数個体を示す資料はないことから、収納骨は1個体に由来することは明らかである。歯の歯冠部には多数の亀裂を有しながらもエナメル質が残存している。これらの歯はすべて永久歯で咬耗は認められず、四肢骨などの骨端部に未癒合部が見られることから、年齢は十代前半程度が想定される。また、歯の計測値は男性である可能性を示している。。

人骨は遺存最大長約4cmで完存したものはなく、歯冠部の全形がほぼ知られるのは8～9点のみで、ほとんど細片化している。色調は灰白色が主体であるが、黒褐色・茶褐色を呈するものもある。歯根部の割れ口は火熱を受けた後に割れた状況を示している。火熱による亀裂や歪

み、および色調の変化には、部位との積極的な関係はなく、部位の偏在も認められなかった。

歯が比較的下部からやや集中して検出されたが、骨蔵器内の上部からのものもあり、収納方法の明白な復元はできなかった。骨蔵器内には直径8mmの小礫1点と数点の小炭化材のみが含有され、土壌の量が少量であったことと、長さ7~8mmの上肢（手）・下肢（足）指骨が認められることと併せて考えると、丹念に骨のみが採集されたものと想定される。

骨の亀裂等の状況から火葬時には800°前後の火熱を受けたものと推定され、少なくとも腱や筋肉といったものが遺存している状況で火熱を受けていることを示している。

② **大御堂第3号火葬跡** 検出入骨は遺存最大長が13mm以下の小片が十数点で、総重量は僅かに6gである。部位はほとんど確認できない。灰白色を呈し亀裂が認められ、強い火熱を受けたものと考えられる。径30mm程の木炭片が数点出土している。

③ **大御堂第4号火葬跡** 検出入骨の遺存重量は971gと比較的多量であり、確認部位は頭蓋骨・岩様部（左右各1個）・椎骨・肋骨・肩甲骨・橈骨・中手骨又は中足骨・大腿骨頭・脛骨・中節骨・四肢骨などほぼ全身にわたる。遺存最大長は65mmである。破片数量は300点以上で、ほとんどが灰白色を呈し亀裂・歪みも確認されることから、強い火熱を受けた人骨であると判断される。1個体の骨からなる。年齢は下顎第3大臼歯の歯根が完成していることから、成人であることは明らかである。しかし、被熱のため歯冠部にエナメル質を欠いているため、咬耗の程度を知ることができず、それ以上の詳細な年齢は不明である。

④ **大御堂第5・6号火葬跡** 検出入骨の遺存重量は313gであり、確認部位は頭蓋骨・四肢骨で、遺存最大長は56mmである。ほとんどが灰白色を呈し亀裂・歪みも確認されることから、強い火熱を受けた人骨であると判断される。

本遺構は平面形状から2基の火葬跡の重複と考えられたが、調査時に明瞭な切り合い関係は確認できず、人骨及び炭化物を2つの遺構に分けることもできず、人骨については1遺構内のものとして取りあげた。遺構内では出土位置がやや北東にまとまって、南西側の出土量が少ないように思えたが、検出入骨の部位の同定や個体数などで有意なデータを引き出すことはできなかった。

⑤ **大御堂第7号火葬跡** 検出入骨の遺存重量は905gと比較的多量であり、確認部位は頭蓋骨・岩様部・眼窩部・歯根・肋骨・橈骨・大腿骨頭・膝蓋骨・四肢骨などほぼ全身にわたる。岩様部については左右各1個づつが検出された。遺存最大長は72mmである。破片数量は200点以上で、ほとんどが灰白色を呈し亀裂・歪みも確認されることから、強い火熱を受けた人骨であると判断される。人骨は1個体からなる。

⑥ **大御堂第9号火葬跡** 本遺構の検出入骨の遺存重量は1,243gと埋葬遺構中では最も多量であり、確認部位は頭蓋骨・岩様部・乳様突起・眼窩・下顎骨・下顎顆・歯・歯根・椎骨・肋骨・肩甲骨・四肢骨・橈骨・中手骨又は中足骨・指骨・距骨などほぼ全身にわたる。遺存最大長は65mmである。ほとんどが灰白色を呈し亀裂・歪みも確認されることから、強い火熱を受けた人骨

であると判断される。本遺構の人骨は、下顎結合部が2個あることから2個体分に由来することが分かる。歯と骨に大小2型あり、それぞれが男女である可能性を示唆している。そのうち女性と思われるほうは左下顎第2・第3大臼歯が萌出し歯根が完成しているので成人であるが、エナメルキャップを欠き咬耗度が不明なため、それ以上の詳しい年齢は分からぬ。男性と思われる方についても、骨端部の癒合状態から成人と判断される。

- ⑦ **大御堂第10号火葬跡** 本遺構の検出入骨の遺存重量は85gと僅かであり、確認部位は歯・四肢骨のみである。いずれも灰白色を呈し亀裂が確認されることから、強い火熱を受けた人骨であると判断される。人骨は1個体からなる。4個の歯が検出されており、歯のサイズ及び犬歯の咬耗度は成人男性であることを示している。
- ⑧ **大御堂第11号火葬跡** 本遺構の検出入骨の遺存重量は393gとやや少なめであり、遺存最大長は72mmである。破片数量は200点以上で、確認部位は頭蓋骨片・上顎骨片・歯・四肢骨などである。いずれも灰白色を呈し亀裂が確認されることから、強い火熱を受けた人骨であると判断される。本遺構の人骨は1個体からなる。歯では、左上顎第1(?)大臼歯、右下顎第2小臼歯などが検出されている。遺存している四肢骨・歯のサイズからは、女性である可能性が窺える。歯根の完成度から成人であると判断されるが、エナメルキャップを欠き、咬耗度が不明で、それ以上の詳しい年齢は分からぬ。
- ⑨ **大御堂第1号火葬墓** 本遺構の検出入骨の遺存重量は580gとやや多く、確認部位は頭蓋骨・岩様部・下顎前端部・椎骨・胸椎骨・肋骨・肩甲骨・大腿骨・四肢骨など全身の主要部分が認められる。ほとんどが灰白色を呈し亀裂・歪みも確認されることから強い火熱を受けた人骨であると判断される。本遺構は1個体からなる。胸椎椎体部の大きさは、被熱による収縮を考慮に入れても小さめで、女性である可能性を示している。椎体部にごく弱い骨棘状のものが生じているので、成人と判断される。
- ⑩ **大御堂第2号火葬墓** 本遺構の検出入骨の遺存重量は406gとやや多く、230片の破片数を数える。確認部位は頭蓋骨・歯・橈骨・中手骨又は中足骨・四肢骨などが見られる。遺存最大長は63mmで細片化しており、ほとんどが灰白色を呈し亀裂・歪みも確認されることから、強い火熱を受けた人骨であると判断される。本遺構は1個体からなる。歯根の完成度及び四肢骨の骨端部の様子から、成人と判断されるが、性別は不明である。
- ⑪ **大御堂第3号火葬墓** 本遺構の検出入骨の遺存重量は181gで破片数にして100個未満とやや少なく、確認部位は頭蓋骨・肋骨・橈骨・中手骨又は中足骨・四肢骨などが見られる。遺存最大長は35mmで細片化しており、ほとんどが灰白色を呈し亀裂・歪みも確認されることから、強い火熱を受けた人骨であると判断される。
- ⑫ **大御堂第4号火葬墓** 本遺構の検出入骨の遺存重量は90gと少なく、確認部位は四肢骨・肋骨などが見られるのみである。遺存最大長は57mmで細片化しており、ほとんどが灰白色を呈し亀裂・歪みも確認されることから、強い火熱を受けた人骨であると判断される。

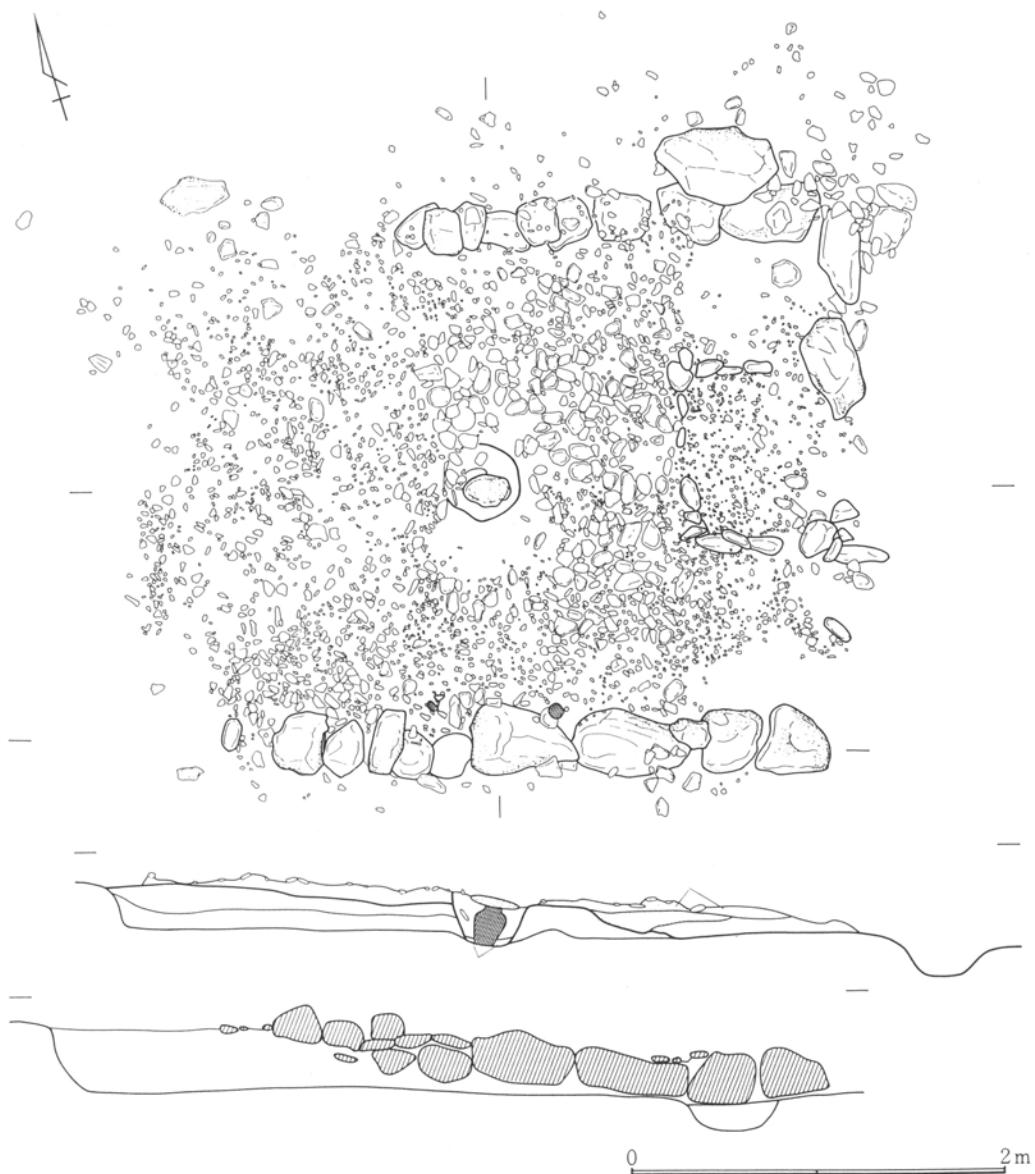
⑬ 大御堂第5号火葬墓 本遺構の検出人骨の遺存重量は580gとやや多く、確認部位は頭蓋骨・下顎骨・椎骨・上腕骨・上腕骨頭・橈骨・尺骨・寛骨・脛骨・腓骨・四肢骨など全身の主要部分が認められ、頭蓋骨には縫合線も見られる。遺存最大長は51mmで細片化しており、破片数にして200片以上である。ほとんどが灰白色を呈し亀裂・歪みも確認されることから、強い火熱を受けた人骨であると判断される。本遺構の人骨は1個体からなると判断される。上腕骨は遺存状態が比較的良好く、ほっそりしていて女性のものである可能性を示している。また、骨端部の様子などから成人と思われる。

⑭ 大御堂第1号土坑墓 本遺構出土人骨のうち、その一部である歯について、「永久歯で、咬耗が進んでおり成人と認められる。鈍い黄橙を呈しており火熱を受けた際に生じる亀裂や灰白色化を示しておらず、・・・」と報告した。報告書作成の段階で様々な制約もあって出土人骨のうち、歯を選んで取り出して観察したためであった。歯についてはエナメル質が残り、遺存状況は比較的良好であった。1個体分からなり、検出された歯の咬耗度から、年齢は20才前後と推定されるが、性別ははっきりしない。

第2表 白石大御堂遺跡埋葬遺構出土人歯一覧

遺構名稱	出土歯種	歯冠近遠心径	歯冠頬舌径	歯骨長(高)	咬耗度(Martin)	備考
大御堂第1号配石墓	右上顎第1切歯	11.2	6.8(+)	8.2	0	個体数1 男性 年齢 10代前半
	右上顎第2切歯	7.1	5.3(+)	11.0	0	
	右上顎第1小白歯	7.7	9.8	8.0	0	
	右(?)上顎第2小白歯	6.1	8.7	5.7	0	
	右上顎第2大臼歯	8.9(+)	11.2	5.5	エナメル質なし	
	左上顎第1大臼歯	11.0(+)	13.0	8.0	0	
	左上顎第2または第3大臼歯	9.1	10.3	4.6	エナメル質なし	
	右下顎第1小白歯	7.8	7.3	8.4	0	
	右下顎第2大臼歯(?)	10.0	/	/	0	
	左下顎第2切歯	6.4	5.6	10.6	0	
	左下顎第1小白歯	7.8	7.5	7.8	0	
大御堂第4号火葬跡	右下顎第3大臼歯	7.8	7.6	12.1	エナメル質なし	成人
大御堂第9号火葬跡	左下顎第2大臼歯	8.1	8.6	/	エナメル質なし	
	左下顎第3大臼歯	7.8	8.1	/	エナメル質なし	
大御堂第10号火葬跡	右上顎第1小白歯	7.7	9.8	8.7	1	個体数1 男性 成人
	左上顎犬歯	8.4	9.2	9.8	2	
	左上顎第2小白歯	7.4	10.5	7.8	1	
	右下顎犬歯	7.2	8.6	11.2	2	
大御堂第11号火葬跡	左上顎第1(?)大臼歯	/	8.8	12.6(*)	エナメル質なし	個体数1
	右下顎第2(?)小白歯	4.7	6.3	13.1(*)	エナメル質なし	
	右下顎第2大臼歯	8.3	7.9	14.2(*)	エナメル質なし	
大御堂第1号土坑墓	右上顎第1切歯	8.7	/	11.1(+)	1	個体数1 性別不明 年齢 20歳前後
	左上顎第1切歯	8.7	/	10.2(+)	1	
	右下顎第1小白歯	7.2	8.2	/	1	
	右下顎第2小白歯	8.4	/	5.7	1	
	右下顎第1大臼歯	11.2	10.5	5.7	1	
大御堂第2土坑墓	左上顎第1小白歯	7.8	7.2(+)	8.9	2	個体数1 男性か 成人
	右(?)下顎第1大臼歯(?)	11.4(+0.5)	/	6.5	2	
	左下顎第2小白歯	7.6	9.1	5.2	2(?)	

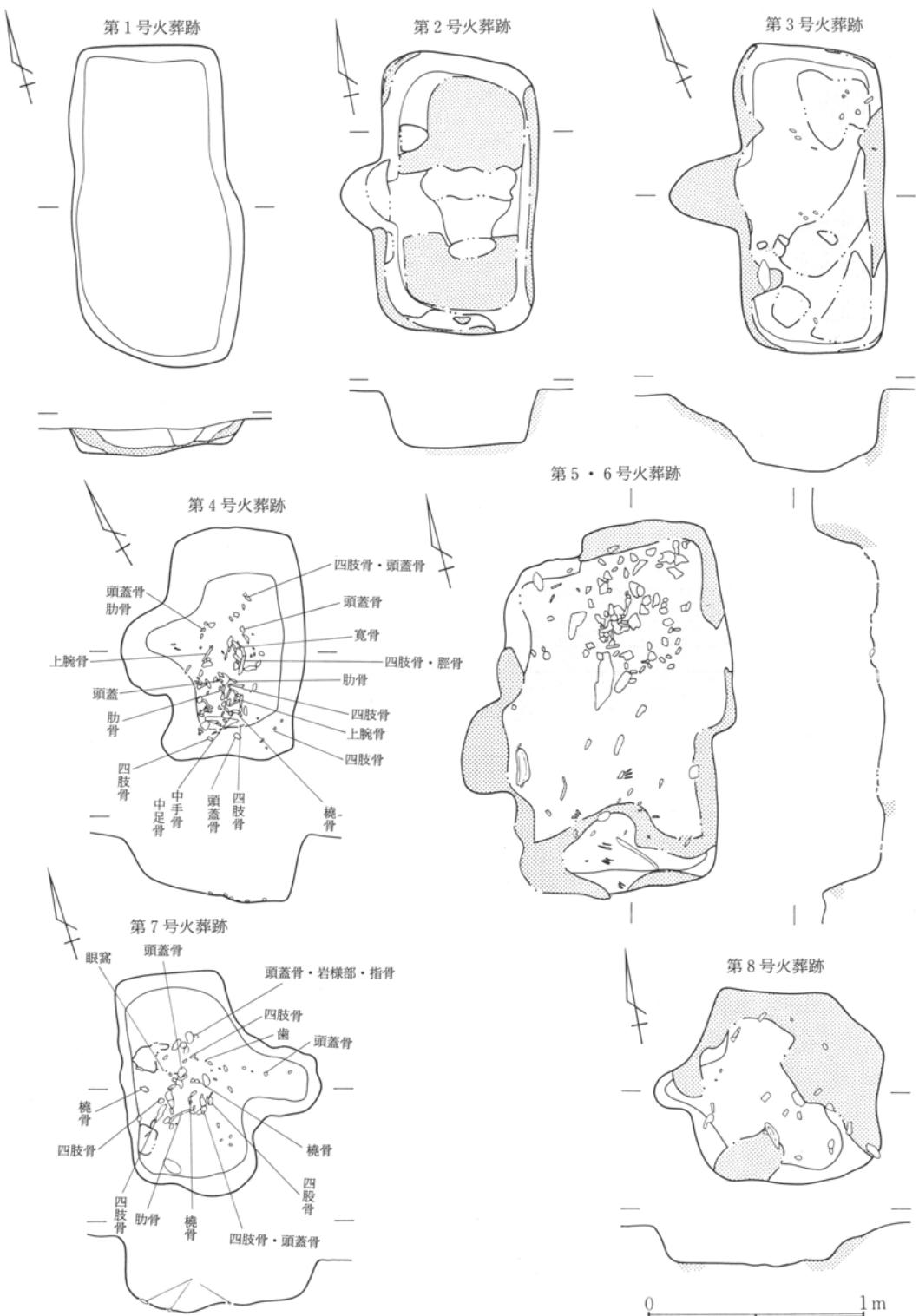
(+ : 遺存値 * : 歯の全長)



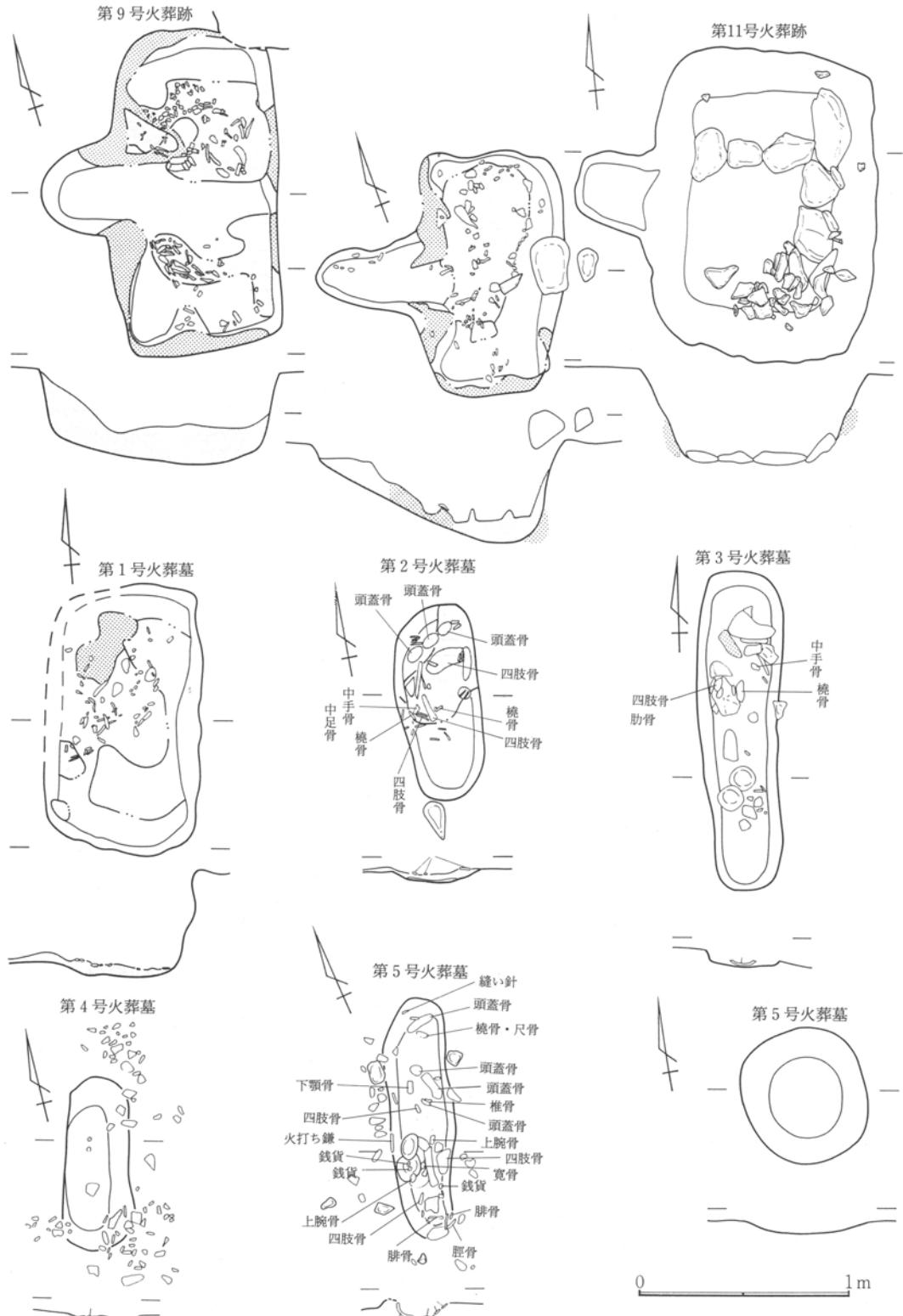
第2図 大御堂第1号配石墓遺構平面図

一方、歯以外の他の人骨65点以上については、ほとんどが灰白色の色調を呈して強い火熱を受けた人骨と判断でき、頭蓋骨・上顎骨・指骨・四肢骨等の部位が確認された。その総量は154gとやや少なく、最大遺存長（頭蓋骨片）は60mmである。

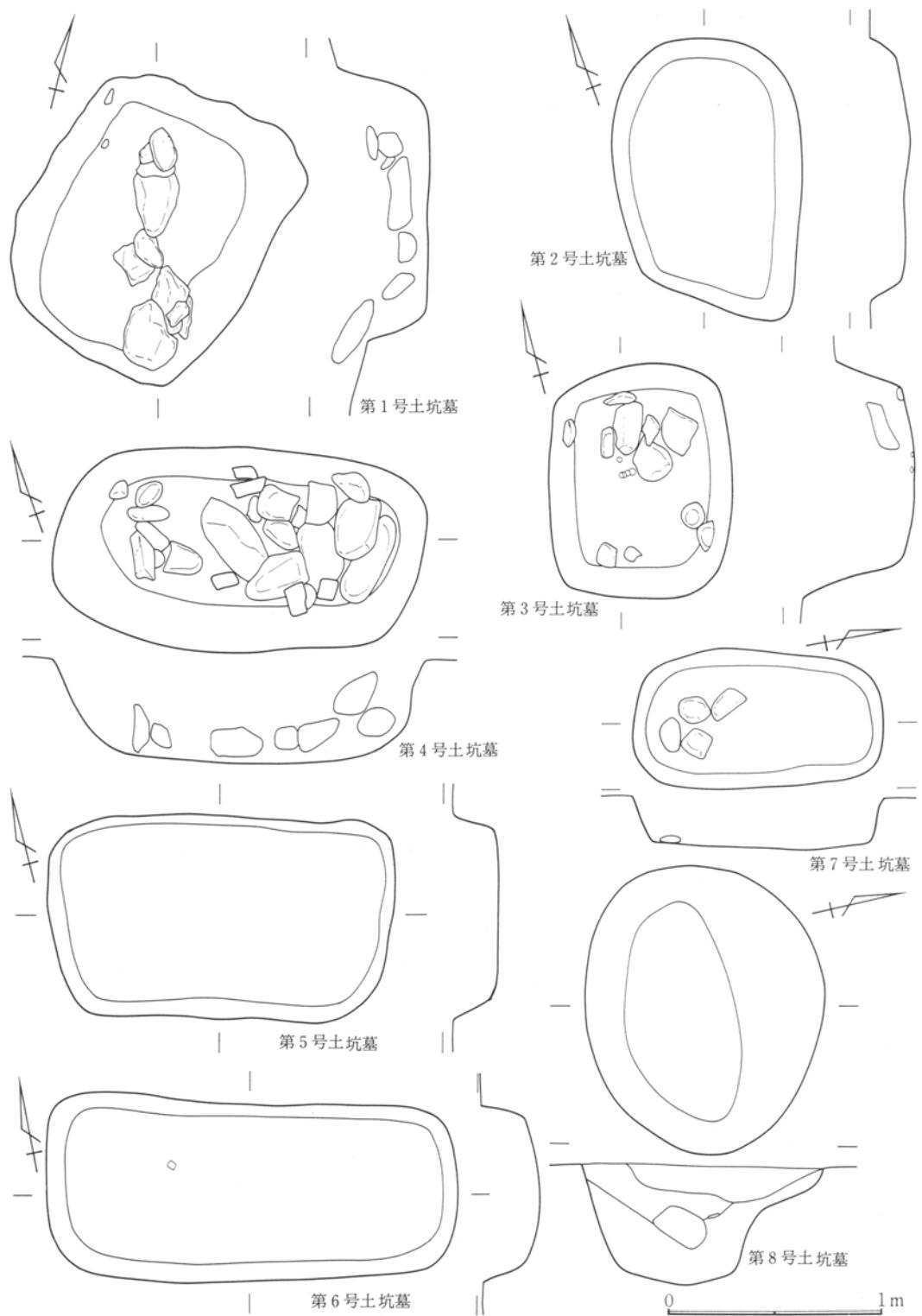
⑮ **大御堂第2号土坑墓** 人骨の出土量は比較的少量で頭蓋骨片・歯などが確認されたのみである。出土した歯は鈍い黄橙色を呈しており、火熱を受けた際に生じる亀裂や灰白色化をしていない。遺存人骨は1個体からなり、歯の大きさは男性であることを思わせる。検出された歯はすべてマルチンの2度の咬耗度に達しており、成人であることを示している。



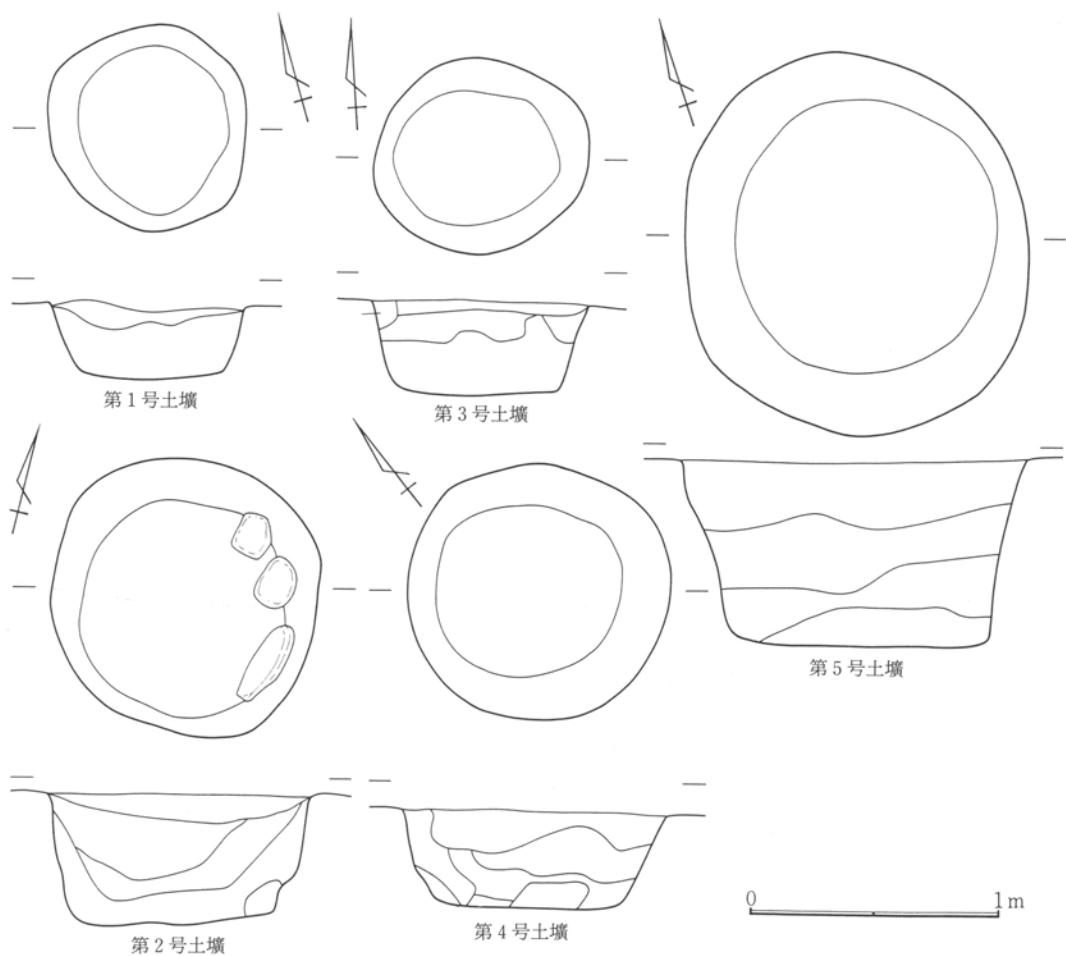
第3図 大御堂調査区埋葬遺構平面図—火葬跡—



第4図 大御堂調査区埋葬遺構平面図一火葬墓一



第5図 大御堂調査区埋葬遺構平面図—土坑墓—



第6図 大御堂調査区埋葬遺構平面図—土壤—

(3) 同定結果からの検討

人骨の同定結果からはいくつかの問題点が提起される。分析の検討課題にしたがって整理してみると次のように言える。

① 火熱を受けているか否か

配石墓・火葬跡・火葬墓の人骨はすべて火熱を受けた人骨と確認し、土坑墓では基本的には火熱を受けていない人骨を確認した。しかし、大御堂第1号土坑墓例には弱い火熱を受けたと見られるものがあり、これについては後述する。人骨の遺存状況にはその量の多寡、遺存状態等に差異が認められ、火熱を受けた状況とも併せて検討を要する問題である。人骨の遺存状況は遺構の性格を示すと考えられ、火熱を受けた人骨がいかなる葬制のもとにあったのかが示唆されよう。土坑墓における人骨の在り方については、遺存の確認出来なかったものが多く、確認されたものも歯の一部のみであった。

② 人骨の遺存状況

大御堂第1号配石墓は単独で存在し、人骨はほぼ1個体分が骨蔵器に収納されていた。本遺構の人骨は火葬されており、その場がどこであったのかが問題として提起される。また、こうした骨蔵器収納例の場合、拾骨がどの程度なされていたかも検討課題であり、ほぼ1個体分が確認された本例は重要であろう。

人骨の遺存状況を見ると、遺構毎にその量及び遺存程度に差異が認められる。人骨の出土しないものあるいは極めて少量のもの、確認部位が部分的で中程度の遺存量のもの、比較的多量あるいはほぼ全身にわたる部位の検出されたものまで多様である。また、部位の確認から複数個体の存在が明らかとなったものもあり、こうした遺存量・遺存状況に見られる差異は遺構の性格を反映すると考えられる。

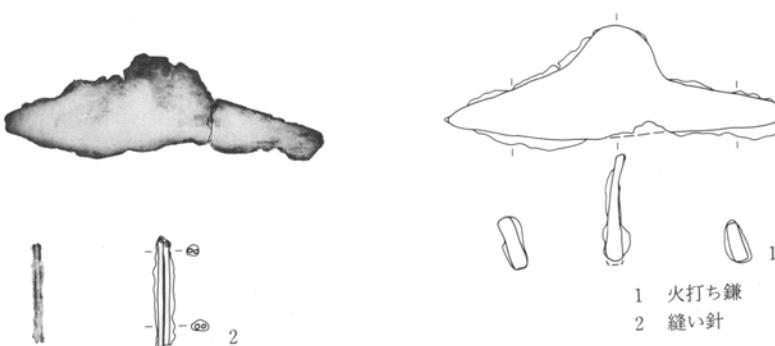
火葬跡としたものでは11基のうち7基から人骨が出土し、すべて火熱を受けていることから、火葬されたものであることを確認した。遺存量が多いものが3基、やや少ないもの2基、少量のものが2基で、人骨の遺存量に遺構間のばらつきが認められた。これは、遺構の残存状況がどの程度であるかも問題であるが、火葬骨の拾骨状況を差を示唆するものと考えられよう。

火葬墓では6基のうち5基から人骨が出土している。遺存量はやや多いもの3基、少ないもの2基である。検出時の確認状況は、遺構底面に近いレベルで、土師質土器・銭貨などの副葬品と見られる遺物と共に火熱を受けた人骨が出土している。

土坑墓では2基で人骨が確認されたがいずれも少量である。いずれも埋土に交じって検出され、歯については前述の如くエナメル質の残存も確認され、火熱を受けたものでないことが確認される。大御堂第1号土坑墓では火熱を受けたものとそうでないものとの人骨の遺存が確認されたが、遺存量が少ないので詳細な検討を加えることはできなかった。火熱を受けていない人骨の同定部位は主に歯で、火葬骨と比較して遺存しにくいことによるものと思われる。

③ 一遺構内の個体数。

火葬跡・火葬墓の遺存人骨が単体か複数個体か、あるいは単体の一部であるかは遺構の性格を考える上で重要な点である。複数個体が確認された遺構は大御堂第9号火葬跡のみであり、



第7図 大御堂第3号火葬墓出土遺物実測図

また、大御堂第5・6号火葬跡では平面形状の確認段階で複数遺構の重複が考えられたが、複数個体という結果は得られなかった。これ以外については、1遺構からは1個体分に由来する遺存を示しており、基本的には1回の使用であったと推定される。

遺存人骨から被葬者の年齢推定がなされた例には次のものがある。

大御堂第1号配石墓の骨蔵器収納人骨は十代前半のものと推定される。大御堂第9号火葬跡からは2個体分が確認され、成人男女と推定される。大御堂第10号火葬跡は成人男性、大御堂第11号火葬跡は成人女性と推定される。大御堂第1号火葬墓は成人女性、大御堂第2号火葬墓は成人と推定できるが性別は不明である。大御堂第5号火葬墓は成人女性と推定される。大御堂第1号土坑墓は20才前後と推定される成人で、性別は不明である。大御堂第2号土坑墓は成人男性である。

確認された人骨からは、年齢・性別が特定のものに偏るという傾向は認められない。

4 人骨の分析結果からの埋葬遺構の検討

人骨の遺存状況は遺構形態・出土遺物とも併せて検討されなければならない。そこで、火葬跡・火葬墓についての具体的事例を通して検証を深めたい。なお、検出人骨の出土位置と部位の同定ができたものについては第3図及び第4図に示した。

(1) 配石墓について

配石墓の骨蔵器内出土人骨は最終的に収納された状態と認められる。調査で明らかとなったのは遺構の下部構造と収納された人骨についてであり、その上部構造がどのようなものであったか、遺存人骨の火葬がどこで行われたか、骨蔵器への収納がどのようになされたかという点等については不明で、今後の検討課題である。また、本遺構は単独で存在していた可能性が高いと見られるが、特に選地に関しては寺院の西端中央部に位置し、寺院と深い関係があると推定される。

(2) 火葬跡について

火葬跡は寺院址東部に3基、寺院址西部の大御堂第1号濠埋土上層面で8基検出され、それぞれまとまって分布している。遺構確認面がほぼ同レベルであることや検出状況がそれぞれの群で似通っている点などから、遺構の構築時期はそれほど大きな差のない時間幅の中に収まると考えられる。遺構の分布に集中傾向が見られるのは“火葬の場”としての意識があったことが想定され、それは寺院とも関係して場の選地が行われていたと考えられる。この点では配石墓と同様と見られるが、配石墓が寺域内部に位置するのに対し火葬跡が寺域周辺部という選地に、意識の差が認められようか。

寺院址東部の3基では大御堂第3号火葬跡に僅かの人骨の遺存が見られただけで、他の2基からは検出されていない。これらは他の火葬跡とした遺構と規模・形状・自然埋没と考えられる埋土などの点にかなり高い共通性が認められるので、時間的にも近接した同種の性格を有す遺構と考えられる。人骨の遺存が僅かに認められたか、あるいは認められなかつたという状況は、火葬

に付された人骨の取り上げが余すところなく行われたものと推定される。しかし、焼人骨の出土しなかった2基については火葬がなされなかつた可能性も否定できない。

寺院址西部の8基の火葬跡は、確認面が大御堂第1号濠跡上面でほぼ同水準であり、埋土下層に炭化物層が、また人骨は炭化物層中の比較的上層部に確認されること、人骨及び炭化物を含む埋土下層と茶褐色・暗褐色土の埋土上層とは明瞭に区別され、遺構形状・遺構規模・遺構長軸方位とも併せて火葬跡として共通の要素と認められる。しかし、一方で人骨の遺存量には多寡が認められ、また、凸字形張り出し部の方向も異なるものが認められ、共通の葬制のもとでの多様な在り方を示している。

次に、火葬跡における人骨の遺存状況と遺構形態の関係を幾つかの事例で検証し、火葬跡としての遺構の性格とそこに見られる葬制を見ることとする。

大御堂第4号火葬跡では、人骨の出土量は971gと多く、遺構中央部から南半分にかけてまとまって検出された。部位はほぼ全身にわたり、頭蓋骨片の分布を見ると遺構内全体に広がっており、肋骨・寛骨や橈骨・脛骨など頭部・胸部・四肢等との分布とも基本的には分散しているように見られた。しかし、詳細に見ると、頭蓋骨はやや中央北東よりに比較的まとまっているようにも見られ、頭位を示しているとも見られる。これは、大御堂第7号火葬跡においても部位の分布が同様の傾向を示し、火葬時には頭位が北であったことが推定される。

人骨の遺存状況の問題点として、拾骨がどのようになされていたのかということが指摘できる。骨蔵器収納骨の例などは火葬の場においてはほぼ完全に拾骨がなされたと考えられるが、火葬跡での人骨の遺存状況には、拾骨にはかなりの程度の差があり、完全に拾うもの、ある程度又は部分的に拾うもの、ほとんどを残したままにしておくものとがあったと考えられる。自然埋没を示す埋土の状況から遺存量の多いものでも放置したものと考えざるを得ない。

大御堂第5・6号火葬跡は、遺構確認時に東壁及び北壁に遺構重複と見られる痕跡が認められ、北東の4分の1の区域に人骨が集中して検出されたことから複数個体の遺存の可能性を考えた。しかし、出土人骨は部位同定の結果から1個体に由来することが判明した。埋土では重複を示すセクションが確認されず、調査時に遺構重複と認めた点が何を意味するのかが課題として残る。複数個体が確認されたのは大御堂第9号火葬跡の1基のみで、成人男女の2個体分が判明している。本遺構に関して、遺構確認の状況や人骨の遺存状況に他の火葬跡と異なった点は特に認められなかった。したがって、2個体の人骨が同時に火葬されたものか、別々に同じ土坑で火葬されたのかを識別することはできていない。この2例は火葬跡の使用回数・使用方法の一端を示していると思われる。しかし、他の火葬跡例は1遺構1個体の人骨遺存が認められ、火葬も1回と見られる。この点については、火葬跡の多様性を示しているとも理解されるが、十分な検証には至らず今後の検討課題として残る。

火葬跡の遺構形状は、11基のうち9基で凸字形と確認され、2基は長方形と推定したが、大御堂第1号火葬跡は検出時の深さ17cmと比較的浅く、近接する大御堂第2号・第3号火葬跡との関

係から本来は凸字形であることが考えられる。また、大御堂第5号火葬跡については大御堂第6号火葬跡がほぼ重複して切り合っており、そのために凸字部が確認できないと考えておきたい。また、凸字形張り出し部は火葬の効率を考えた施設で、長方形と確認されたものも本来は凸字部があったものと推定される。

火葬跡の平均の大きさは長軸長127cm、短軸長74cmであり、深さの計測値平均は39cmであるが、本来は50cm以上の深さであったと思われる。また、凸字形張り出し部を含めた短軸長の平均は107cmである。凸字形張り出し部は、煙道と見る報告例もあるが、凸字部の焼土化が他の壁に比し著しくないことから、通気孔として燃焼効率を高めるための施設と考えたい。いずれの火葬跡も底面は中央部がやや深めにくぼみ、張り出し部に向かってゆるやかな傾斜で立ち上がるが、張り出し部が短いものでは、底面と凸字形張り出し部は段差を持ち、床面から壁面へは急激な立ち上がりが見られる。個々の遺構形状は細かく見ればそれぞれの個性としての異同が認められ、それがどのような意味を持つものかは今後検討しなければならない問題である。

遺構の長軸はほぼ南北で、凸字形張り出し部は大御堂第4号火葬跡が東の他はいずれも西側に見られる。遺構の長軸は棺の長軸に合致すると考えられ、頭位を北にして遺体を安置していたことを示している。その方向は寺院の方位とも合致する。凸字形張り出し部の位置はこの長軸にたいして火葬時の空気（風）の流れを考慮した結果と考えられるが、頭位を北に顔を西にという点が意識され、火葬時の葬礼の正面が西側にあった可能性も推定される。

火葬跡の規模は100～150cm×60～90cmの範囲で、規模の大小には若干の差異も見られる。石守（1988）は中世土壙墓の規模の集計を通じて形態的特徴と葬法について述べているが、そこに示した中世土壙墓の平均的規模124cm×85cmと本遺跡内の火葬跡の平均値126cm×74cmとは近似している。

遺構形態に見られる特徴として、人骨遺存量の多い大御堂第9号火葬跡では、その規模が火葬跡の平均値よりやや小さく、その一方で、通気孔と見られる凸字形張り出し部が他のものに比しやや長いことが指摘できる。また、大御堂第11号火葬跡では他の例と異なり、底面が平坦で礫石の規則的配置が見られた。炭化物と人骨の出土状況から礫石の配列は、火葬時に棺座を安定させることと床面と棺との間を空け、通気を図って燃焼効率を高めるためものとの理由が推測される。火葬跡においては、人骨の検出面が炭化物層の上層部に比較的集中し、遺構底面からはやや上に見られる。これは薪を積み上げ上で火葬したためとも見られる。また、火葬後には拾骨が基本的には行われたものと推定されるが、遺存量の多い例についてどう考えるべきかという点が課題として残る。多くの火葬跡のセクションでは自然埋没と見られる層位が観察され、火葬後に遺構は放置されたと考えられるが、大御堂第9号火葬跡などでは埋め戻された可能性も指摘され、更なる追究が必要である。

(3) 火葬墓について

火葬墓として報告したものは6基である。大御堂第2号～第5号火葬墓の4基については分布

域・遺構形状・遺物残存状況等の点で共通性が認められ、同じ性格のものとして近接した時間幅の中に入る遺構群と考えられる。大御堂第1号火葬墓は、西群の火葬跡分布域にあり、火葬跡との関係が注目される。また、大御堂第6号火葬墓は、遺構平面形状が楕円形であるが、削平の結果とも考えられ、埋土に炭化物が認められるとともに、遺構の位置が大御堂第2号～第5号火葬墓の分布域にあり、検出面が同レベルであったので同じ性格を有する遺構と考えた。

大御堂第1号火葬墓としたものは遺構の2/3が重複により切られ、壁面の一部が焼土化していることと、遺構規模が火葬跡の平均に近く、火葬跡西群の分布域内にあり、火葬跡である可能性も否定できない。しかし、銭貨3枚が検出され、火葬跡としたものには遺物が認められないことから、ここに何らかの意識がはたらいて供献されたものと判断し、火葬跡とは異なる性格を有すものと考えた。本遺構は火葬跡・土坑墓と切り合い関係があり、遺構の変遷を知るうえで重要である。

大御堂第2号～第5号火葬墓の4基は、調査区の北西部に分布し、長軸をほぼ南北に取る長楕円形の形状を示すという点で共通性があり、遺構検出の状況・人骨の確認状況も似ている。大御堂第2号火葬跡及び大御堂第5号火葬墓では頭蓋骨が北よりの位置に確認されたことから、頭位を北として安置されたと考えられる。

大御堂第5号火葬墓は北西部検出の火葬墓群中では最も人骨出土量が多い。部位の確認では北半に頭蓋骨・下頸骨片等が、南半に脛骨・腓骨といった四肢骨片の分布が見られた。底面は弱く火を受けたものと思われ濃茶褐色に焼土化しているが焼き締まってはいない。底面の南半には炭化した藁が認められる。ここでは副葬遺物と考えられる皿形の土師質土器2点が遺構の中程で側壁によせるように出土した。火葬墓とした遺構は平均の深さが6cmと残りが良くななく確認された形状がどれほど本来のものに近いか不明であるが、遺物の遺存状況からは削平はかなり進んでいるものの、本来の遺存状況をとどめていると推定される。土師質土器の出土状態は大御堂第3号火葬墓でも同様の出土状況を示す。また、針・火打ち鎌と思われる鉄製品が2点出土し副葬されたものと考えられる。(第7図参照)

(4) 火葬跡と火葬墓の相違点

火葬跡と火葬墓とは、遺構の分布や平面形状等に違いが認められ、特に遺物の有無に差異があり、別種類の遺構と考えた。大御堂第2号・第3号・第5号火葬墓の土師質土器の出土状況は、遺存する人骨を意識して置かれていると見られ、その位置と出土状況は土坑墓とも共通していると指摘できる。火葬墓の平均深さが約6cmと火葬跡に比べ非常に浅かったが、上部構造があるとすればそれを含む本来の形状の追究が課題として残る。ただし、本遺跡例においては壁面や床面の一部に鈍い赤褐色に焼土化していることや埋土に炭化物層が検出されたことなど、ここで火葬がなされたことを意味していると考えられ、この点では火葬跡の一形態を示すと言えないこともない。

火葬墓における遺物の副葬がどの時点でどのようになされるのかが問題であるが、本遺跡にお

いては遺体の火葬後に供献されたと判断した。これは皿形土師質土器が遺構底面に近いレベルで出土し、2次的に火熱を受けたとは認められなかったためである。錢貨についても残存状況から同様に判断した。しかし、副葬の在り方については引き続き今後の検討課題としたい。

(5) 土坑墓について

土坑墓においては明らかに人骨遺存状況が火葬例に比べて悪く、遺存状況をもとに比較するには至っていない。しかし遺構の長軸の示す方位が大御堂第1・2・3号土坑墓と大御堂第4・5・6号土坑墓とでは明らかに異なり、葬制の変化を示すものと考えられる。

大御堂第1号土坑墓からは火葬人骨も検出されたが、棺材と見られる木片とそれに付着した錢貨の出土と火熱を受けない歯の出土、棺の押えに使用したと思われる礫石列の検出もあって土坑墓の存在を確認した。火熱を受けない歯は暗褐色粘質土中より出土している。一方で、本遺構の埋土最下層は炭化物層であり、火葬跡の存在も考えられる。しかし、本遺構での遺存人骨はやや茶褐色気味の灰白色を呈し、火熱の受け方が他の火葬跡・火葬墓検出例とは異なって弱いように思われ、それらと同一の状況であったとは言い切れず、統一的な理解はしにくい。

土坑墓の在り方で重要な点は、長軸の示す方向が大御堂第1号～第3号土坑と大御堂第4号～第6号土坑墓との間に大きな差異が認められることである。この第4号～第6号土坑墓とした遺構が、遺体の埋葬された墓であったとするならば、上記の現象は、寺院・配石墓・火葬跡・火葬墓・土坑墓の一部を通して認められた方位の規制から離れたことを示していよう。さらに、大御堂第3号土坑墓の場合は寺院址遺構である大御堂第11号溝状遺構を切って構築されており、その暗渠用石材を蓋石に転用したと見られ、少なくともこの土坑墓の構築時には既に寺院の規制から外れていることを示している。



第8図 大御堂調査区埋葬遺構出土遺物実測図一鉄製品一

〔1・2. 第9号火葬跡 3. 第10号火葬跡 4. 第11号火葬跡 5. 第4号火葬墓
6. 第5号火葬墓 7～10. 第1号土坑墓〕

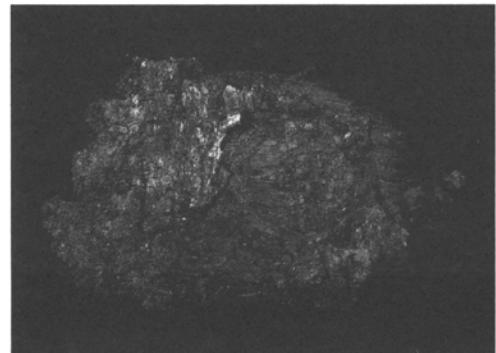


写真1 第1号土壙墓出土木材
(右上に錢貨の跡がある)

(6) 出土遺物からの検討

埋葬遺構からは人骨の他に、土師質土器・銭貨・鉄製品などの出土遺物と、多量の炭化物が出土している。これらの資料には火葬若しくは埋葬時の状況を示唆するものが多分に含まれている。特に、多量の炭化物が出土する例は、壁等の焼土化と併せて考えれば、火葬の痕跡を残したものと考えられる。炭化物の遺存量の多い大御堂第5・6号火葬跡では樹種同定の結果、クリ・タケ類がほとんどであることが判明した。これをすべて茶毬の薪として利用された結果を見るか、それ以外の葬礼に利用した道具類をも含むかどうかは今後の検討課題である。

大御堂第1号土坑墓で検出された棺材と見られる木片は、針葉樹の一種であると思われ、大御堂第3号火葬墓の炭化物にも針葉樹と思われるものがある。これらの針葉樹については棺材に使用された樹種を示していると思われる。また、棺の使用を示す遺物として釘と考えられる鉄製品の出土が見られた。大御堂第5号火葬墓では火打ち鎌・針など副葬品と見られる鉄製品（第7図参照）の出土もあったが、それ以外の遺構出土の確実な鉄製品は10点ですべて釘と見られる（第8図参照）。これらの釘は遺体を棺に納めていたことを示唆する遺物であり、火葬跡・火葬墓そして土坑墓のそれぞれに認められることから、いずれの場合においても遺骸を木製の棺に収めていたことが想定される。

5 大御堂埋葬遺構群における遺構間の関係について

(1) 埋葬遺構群とその年代観について

白石大御堂遺跡の埋葬遺構群は火葬された一群と土葬された一群のあることが判明し、更に火葬された一群には、遺構の形態や人骨の遺存状況及び遺物の出土状況等から配石墓の他に火葬跡と火葬墓の相違も認められた。そこで、人骨の遺存状況の分析と遺構形態の検証を通して、配石墓・火葬跡・火葬墓・土坑墓・土壙といった遺構の種別毎の特徴及びその関連性と時間的な位置付け、そして大御堂埋葬遺構群における葬制の変遷と葬法の変化を考えてみたい。

大御堂調査区寺院址遺構内において確認された埋葬遺構のなかで最も古いのは大御堂第1号配石墓と考えられる。同遺構出土の骨蔵器は、生産年代においては寺院址出土の陶磁器類とも同じ時間幅に入る古いもので、その埋納年代はやや下ると考えられるが、埋葬遺構の上限を示す遺物である。遺構は寺院西端中央部で東を正面に構築され、園池を意識しての配置がなされ、寺院または寺院址と何らかの関連が想定される。上部構造は不明であるが遺構の残存状況から、石造物の置かれていたことが考えられる。

埋葬遺構が多く分布する寺院址西部では、石造物類が量的には多くないものの多種に亘って見られる。いずれも廃棄されたもので、製作年代は線刻五輪塔が15世紀中頃、板碑では14世紀中頃のものが1点の他は15世紀代と推定される。これらの石造物類は墓の上部構造をなすものと考えられ、直接これに関連した遺構の検出はされなかったが、配石墓の構築時期と平行する部分も含む。しかし、全体的には、検出状況等から判断してやや後出の時期が推定される。

石造物類のまとまった廃棄は大御堂第1号濠跡の埋土及びその周辺に集中し、その上面に火葬跡群が構築されているが、濠内への石造物廃棄はこれ以前の時期である。板碑については造立のピークとなる時期は14世紀中頃から後半にかけてで、火葬跡・火葬墓はその廃棄後の構築となる。

火葬墓・土坑墓に副葬された土師質土器については、従来の編年に従えば型式的な差は大きくは認められず15世紀後半から16世紀代にかけての年代観が与えられ、火葬墓出土のものと土坑墓出土のものとは時間的に比較的近接したものと考えられる。しかし、器壁の厚さや体部の傾斜角度には若干の相違も認められ、これらの差異が同一型式の内の多様性の中に含まれるものか、それとも多少の時間差をも含むものは検討が必要である。ただし、少なくとも火葬墓出土のものと土坑墓出土のものとには若干の時期差を含む形式的差異が認められよう。

銭貨はその銭種によって遺構の絶対年代を推定する手掛かりとなる。本遺跡では輸入中国銭がほとんどであるが、主に11・12世紀代のもの（宋銭）と14・15世紀代のもの（明銭）とが見られる。銭種の構成を見ると「永樂通寶」がひとつの指標となる。「永樂通寶」を出土するものとそうでないものとがあり、「永樂通寶」のみを出土する大御堂第2・4・5号火葬墓は銭貨のみを基準とする比較では最も新しい時期と考えることができよう。なお、銭貨については私鑄銭等の問題も考慮しなければならないが、輸入銅銭の一般的流通傾向は反映していると考えられ、「永樂通寶」が流通する15～16世紀代は遺構構築の年代と言える。これは、土師質土器の年代観とも合致する。

(2) 埋葬遺構群の変遷

大御堂調査区検出の埋葬遺構群の中で最も古いものは大御堂第1号配石墓であり、遺物としても同遺構の骨蔵器が渥美窯製として埋葬遺構群の上限を示す。これに続いて火葬跡・火葬墓が造られたと考えられ、土坑墓そして土壤へと変遷する。その変遷はいくつかの事例を通して検証が可能である。そのひとつは遺構の重複を基準に考えるもので、大御堂第9号火葬跡・大御堂第1号火葬墓・大御堂第1号土坑墓の例からは「火葬跡→火葬墓→土坑墓」という図式が想定され、「火葬墓→土坑墓」という流れは銭種に見られる新旧関係の推定とも矛盾しない。

埋葬遺構の変遷を推定するもうひとつの手掛かりは寺院または寺院址との関係である。遺構の位置からは、配石墓・土坑墓と火葬跡・火葬墓との間には寺域内部か周辺部かで差異が見られ、同じ寺域内部でも配石墓と土坑墓とでは、寺院の中心線に位置する配石墓は土坑墓の選地とは明らかに異なっている。さらに寺院遺構との重複関係を見ると、配石墓・火葬跡・火葬墓の例では溝状遺構・濠跡等の自然埋没がある程度進んだ段階での構築である。また遺構の長軸の示す方位(N-13°-E)は寺院の主軸方位(N-77°~78°-W)とほぼ直交し、有意の関係が認められるこの規制は大御堂第4号～第6号土坑墓や土壤においては見られなくなる。また、大御堂第3号土坑墓は暗渠を切ってその石材を転用していることから、寺院との関係が希薄になっていることが窺われる。

火葬跡からは年代を推定するに足る遺物の出土が見られず、直接の手掛かりは重複遺構の事例のみであるが、配石墓に続く時期が想定され、火葬跡の中に火葬墓へと移っていったものがあると想定される。

大御堂遺跡における埋葬遺構の構築は、配石墓に始まり骨蔵器収納人骨は火葬に付されていることから、別に火葬の場があったことが考えられ、火葬所と埋葬所という少なくとも葬制上の2つの場の設定がなされているものと考えられる。火葬跡はこの火葬所としての性格を持つ遺構として理解される。火葬墓については一方で火葬所としての性格を認めながらも副葬遺物の出土もあって埋葬所としての性格も付与されたものと考えられる。これを火葬跡と厳然と区別して取り扱うには遺存人骨や遺構の状況に共通点も多く、火葬跡の変異形態のひとつとも理解できる。この点については、今後の調査において明らかにされるべき検討課題として残る。

5 おわりに

白石大御堂遺跡で検出された埋葬遺構群は、中世の上野国における葬制の在り方とその時間的・空間的変遷を示す資料として重要である。ここでは骨蔵器を伴う配石墓の造営に始まり、“火葬所”としての性格を持つ火葬跡・火葬墓などや、“埋葬所”としての性格を有する火葬墓・土坑墓・土壙などが造られ、また、それが寺院の消長とも関係していくつかの葬制上の画期となる事柄が認められた。そこには、陶器を骨蔵器に利用し火葬人骨をそれに収納し埋葬するという、中世的な火葬の出現、そして火葬跡・火葬墓などのある集団の葬地として寺の一角が使われ、火葬の在り方が次第に変化し、再び直葬へと変わって、寺との関係が薄くなつて行く様子が窺える。

そのなかで、個々の遺構・遺存する人骨や出土遺物などが提起する問題も少なくない。

配石墓では出現の契機、火葬の場、下部構造と上部構造の在り方などが問題であり、火葬跡・火葬墓においては、火葬の実態と火葬骨の拾骨及び埋葬方法、火葬から土葬への移行の問題等が課題として残されている。また、寺院との関係や火葬が中世において広がりを見せる社会的背景やそこでの多様性の理解なども問題である。また、人骨の火熱の受け方と遺構内のその痕跡の検証（炭化物の残存状況や壁・床等の焼土化の様子）、人骨の遺存状況の解剖学的検討と遺存人骨から見た火葬の実態の解明（棺や頭位の問題、さらには顔の向きなどなど）、といった問題は発掘調査を通じてある程度は明らかにすることができる課題であるとの感触も得られた。

今回の分析・検討の結果によって、火葬を中心とする葬制の状況について十分な検証ができたとは言い難いが、その一端を示すことはできたと思われる。今後、類例遺構との比較検討を通じて更に検証を深め、中世の葬送・葬制の実態を明らかにしていきたい。

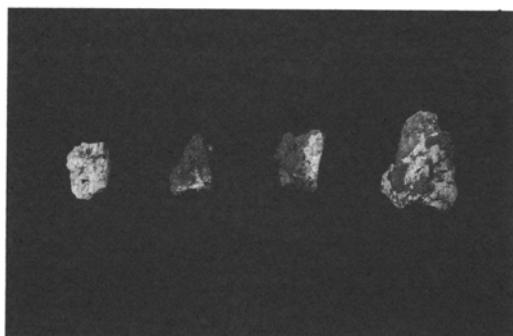
最後に、本小稿をまとめるにあたり、西川制、大江正行、木津博明、右島和夫、関根慎二、小林裕二、唐澤至朗の各氏を始め、多くの方々のご指導・ご協力があったことを文末ながら記して感謝の意を表したい。

(みやざきしげお 群馬県立大間々高等学校、つがねざわよしげ 群馬県教育委員会、
わたぬきえいじろう・いいじまよしお 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)

引用・参考文献（五十音順）

- 石守晃 1989 「所謂中世土壙墓について」『群馬の考古学』pp533～540 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 磯部淳一 1987 「武藏型板碑の周辺一小幡型板碑を考えるー」『群馬県立歴史博物館紀要』第8号 pp51～78 群馬県立歴史博物館
- 磐田市教育委員会 1988 「一の谷中世墳墓群」
- 木下密運 1986 「5墳墓 B中世の墳墓」『日本歴史考古学を学ぶ（中）』pp133～146 有斐閣
- 久保常晴 1984 「火葬墓の類型と展開」『新版仏教考古学講座 第7巻 墳墓』pp5～12 雄山閣
- 久保常晴 1984 「墓地と火葬場」『新版仏教考古学講座 第7巻 墳墓』pp223～235 雄山閣
- 綿貫銳次郎他 1991 「白石大御堂遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 群馬歴史考古同人会火葬墓分科会 1984 「研究資料No1」 群馬歴史考古同人会
- 坂詰秀一 1990 「歴史考古学の問題点」近藤出版社
- 斎藤忠 1978 「墳墓」日本史小百科4 近藤出版社
- 水藤真 1991 「中世の葬送・墓制」吉川弘文館
- 新倉明彦 1989 「出土板碑より見た板碑の造立と廃棄について」『群馬の考古学』pp541～550 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 藤沢一夫 1970 「火葬墳墓の流布」『新版考古学講座 6』pp273～292 雄山閣
- 藤澤典彦 1989 「中世墓地ノート」『特集 中世の墳墓』仏教芸術182号 pp12～26 毎日新聞社
- 山村宏 1988 「一の谷中世墳墓群の発掘」『中世の都市と墳墓』pp121～148 日本エディタースクール出版部

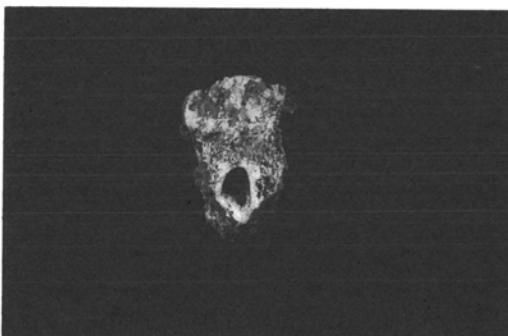
第1図版



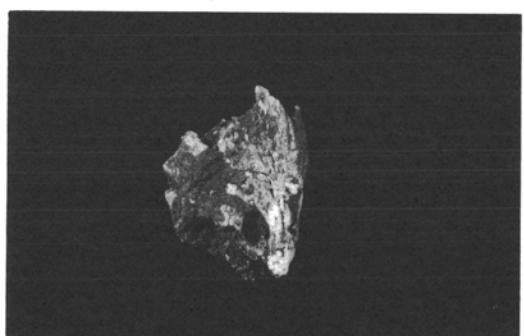
1 第3号火葬跡 人骨片



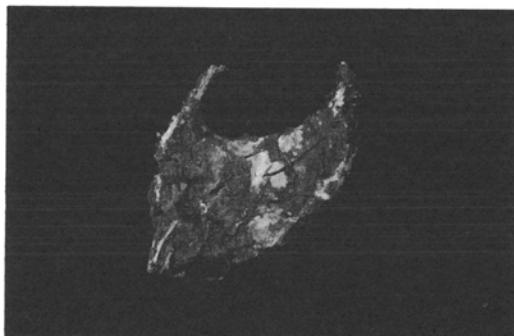
2 第4号火葬跡 齒(右は第3大臼歯)



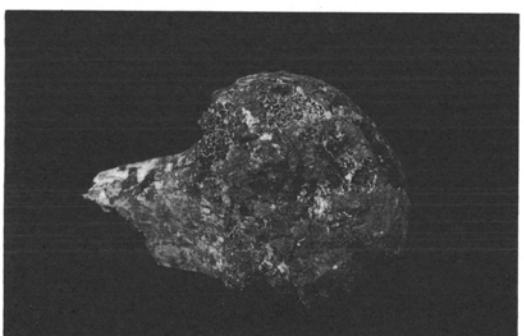
3 第4号火葬跡 右岩様部



4 第4号火葬跡 左岩様部



5 第4号火葬跡 肩甲骨



6 第4号火葬跡 大腿骨頭



7 第4号火葬跡 槌骨か?

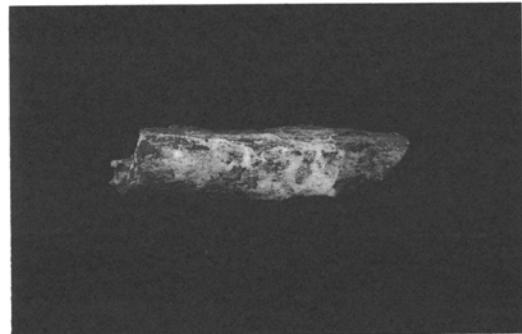


8 第4号火葬跡 上腕骨か?

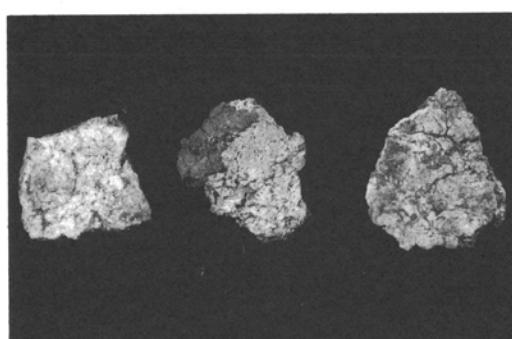
第2図版



1 第4号火葬跡 大腿骨か？



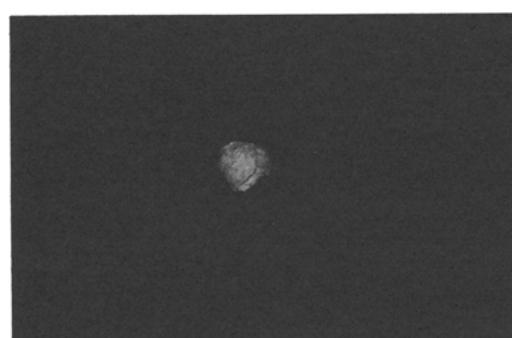
2 第4号火葬跡 中手または中足骨か？



3 第5・6号火葬跡 頭蓋骨



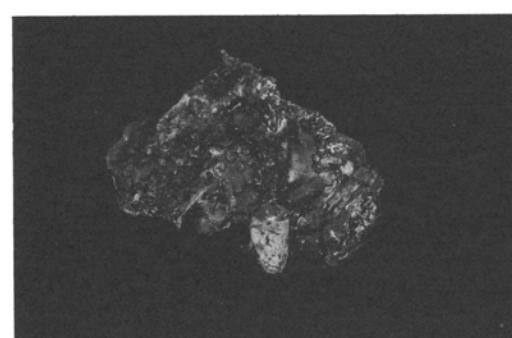
4 第5・6号火葬跡 四肢骨



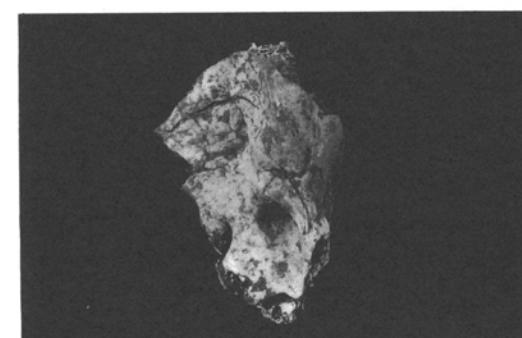
5 第7号火葬跡 齒



6 第7号火葬跡 齒根

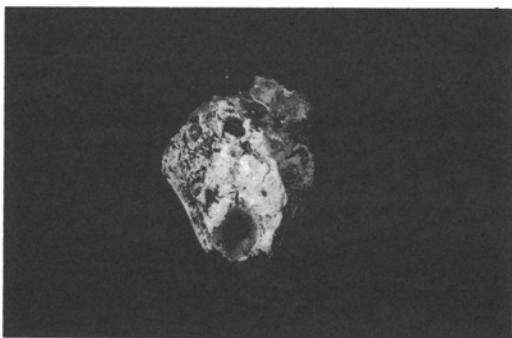


7 第7号火葬跡 齒根

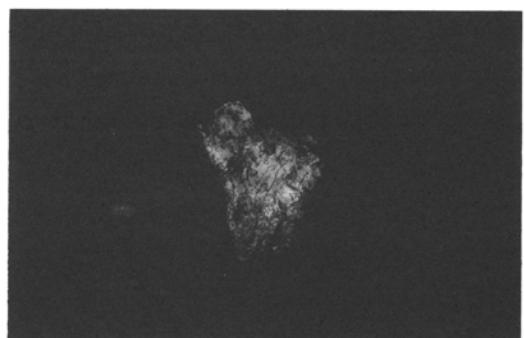


8 第7号火葬跡 左岩様部

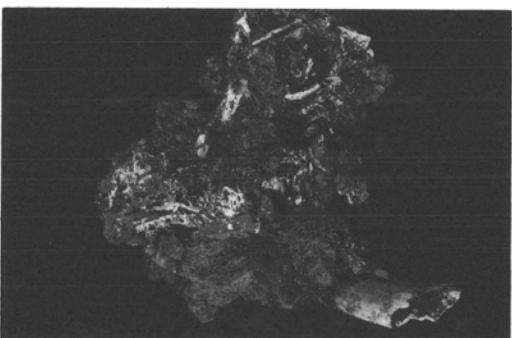
第3図版



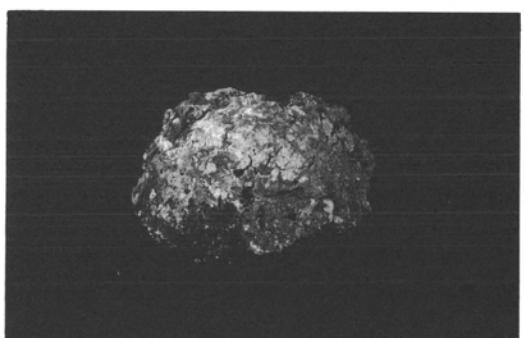
1 第7号火葬跡 右岩様部



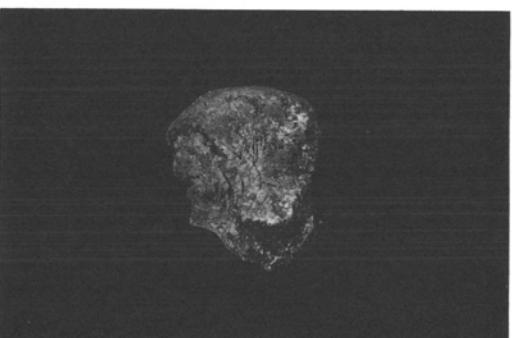
2 第7号火葬跡 左眼窩部



3 第7号火葬跡 中手または中足骨



4 第7号火葬跡 上腕骨頭または大腿骨頭



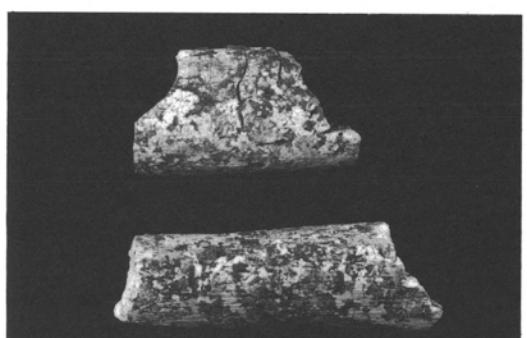
5 第7号火葬跡 関接部



6 第7号火葬跡 肋骨



第7号火葬跡 肋骨

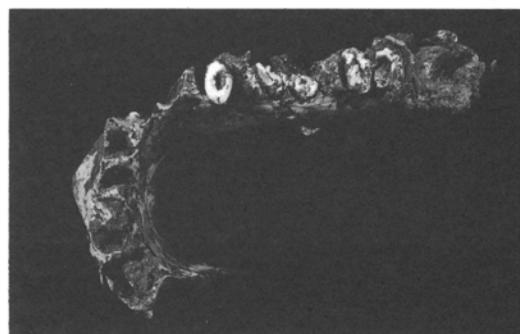


8 第7号火葬跡 四肢骨

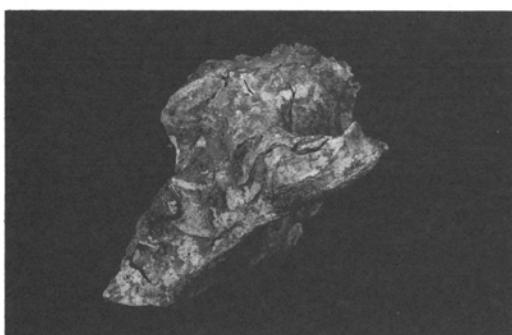
第4図版



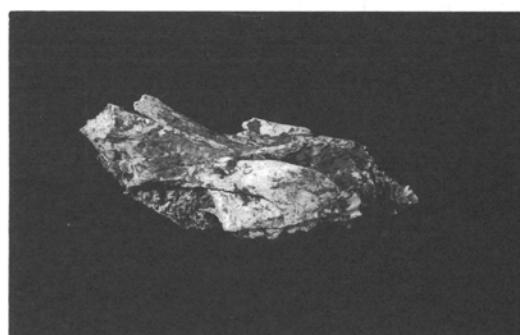
1 第4号火葬跡 左下顎骨



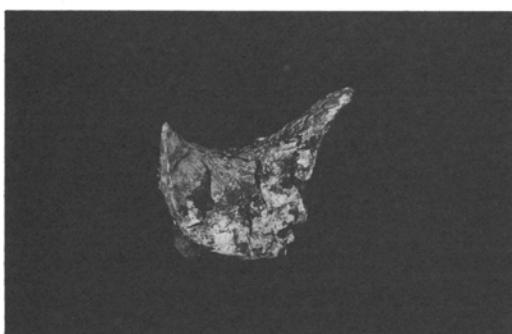
2 第9号火葬跡 下顎骨



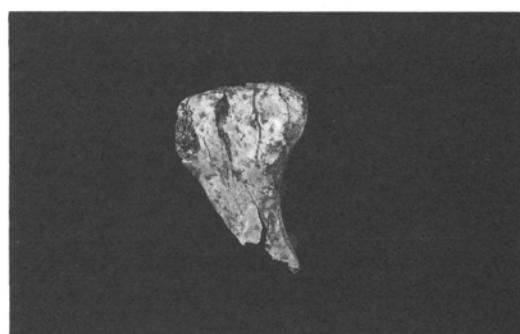
3 第9号火葬跡 下顎窩部



4 第9号火葬跡 左下顎骨



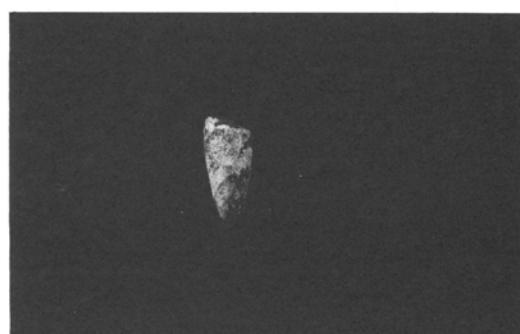
5 第9号火葬跡 下顎結合部



6 第9号火葬跡 左下顎骨

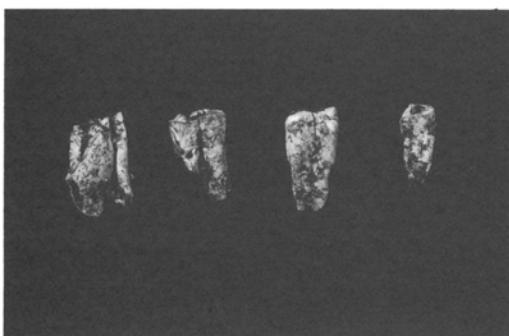


7 第9号火葬跡 歯および歯根

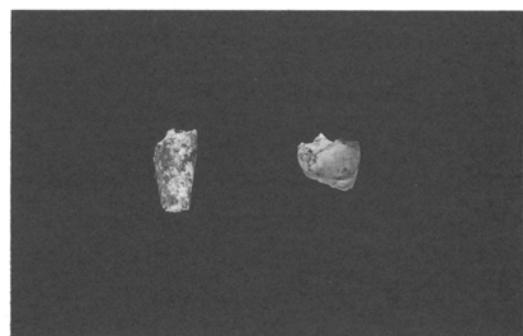


8 第9号火葬跡 歯

第5図版



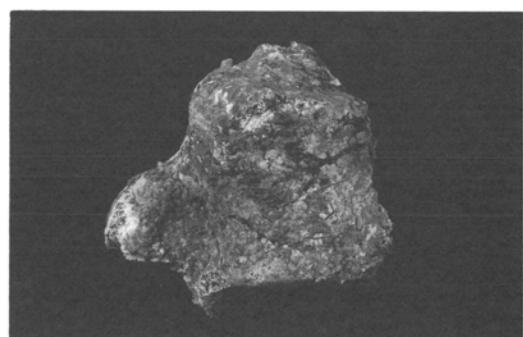
1 第9号火葬跡 齒根



2 第9号火葬跡 齒根および歯冠



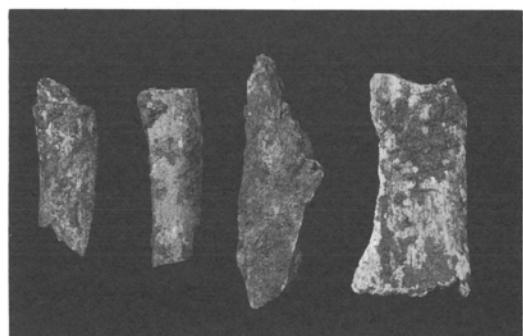
3 第9号火葬跡 右岩様部



4 第9号火葬跡 左距骨



5 第9号火葬跡 中手または中足骨



6 第10号火葬跡 四肢骨片など

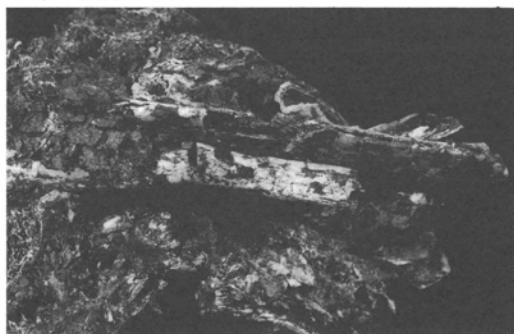


7 第11号火葬跡 齒

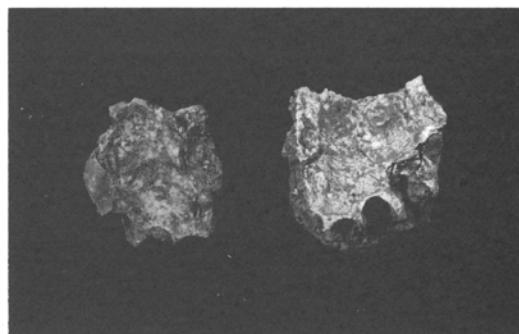


8 第11号火葬跡 肋骨

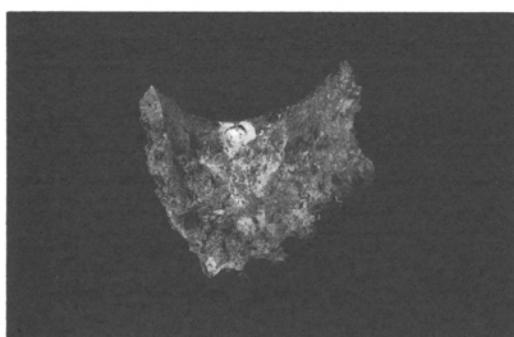
第6図版



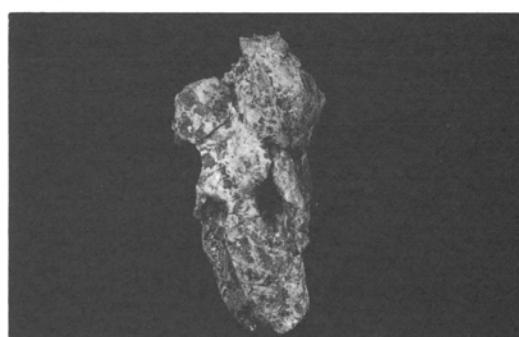
1 第11号火葬跡 肋骨など



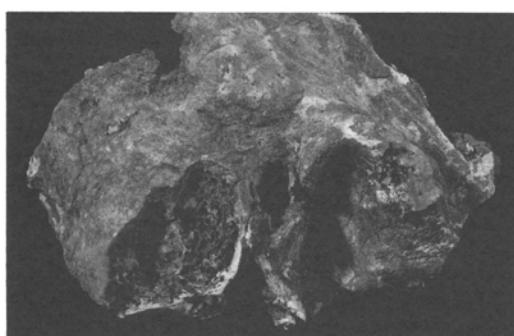
2 第11号火葬跡 上顎骨



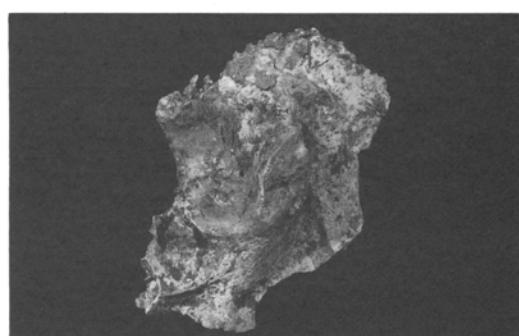
3 第1号火葬墓 下顎結合部



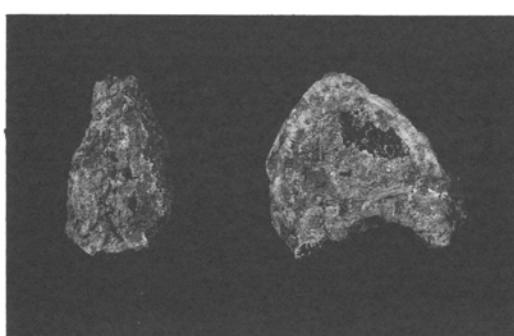
4 第1号火葬墓 左岩様部



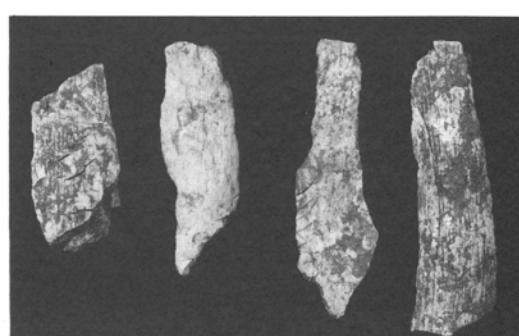
5 第1号火葬墓 右側頭部



6 第1号火葬墓 左側頭部

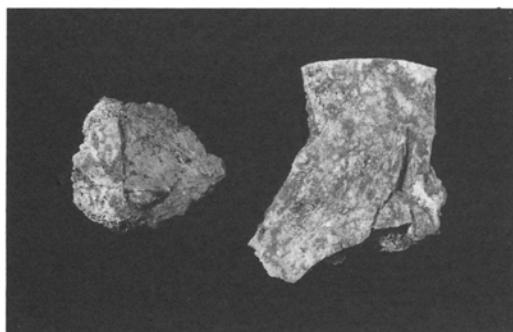


7 第1号火葬墓 椎骨椎体

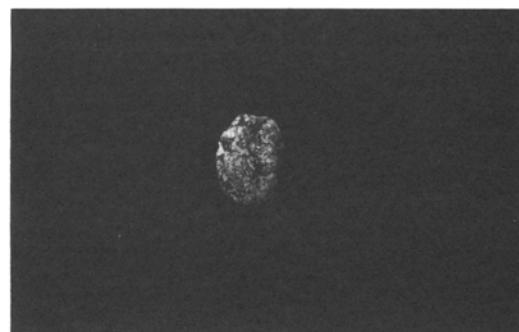


8 第2号火葬墓 四肢骨

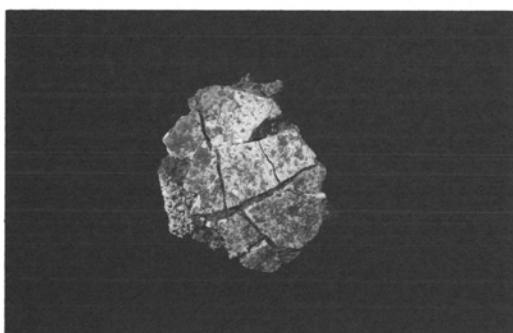
第7図版



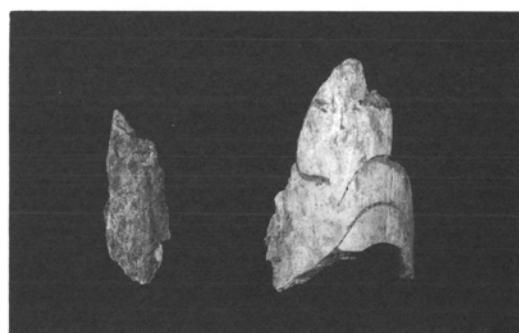
1 第2号火葬墓 頭蓋骨



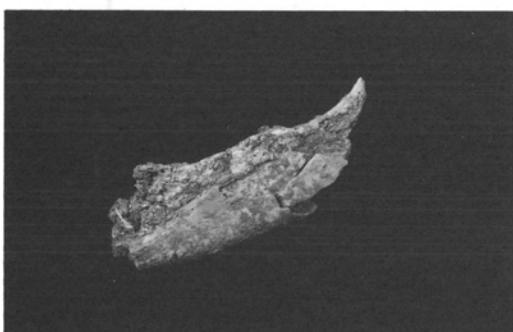
2 第2号火葬墓 大臼歯歯根



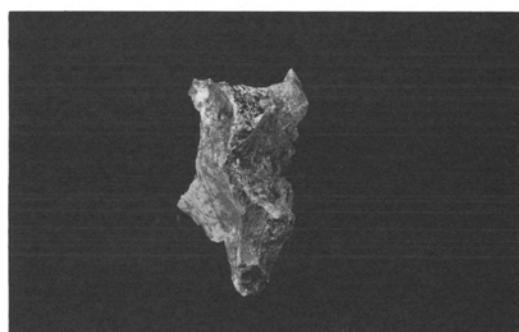
3 第3号火葬墓 頭蓋骨



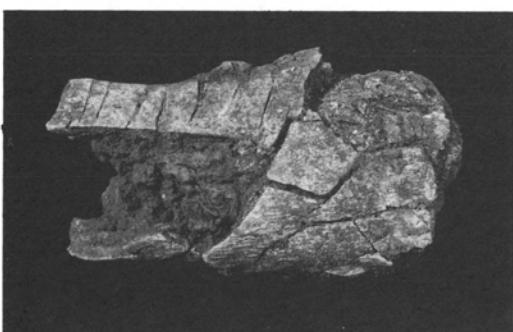
4 第4号火葬墓 四肢骨



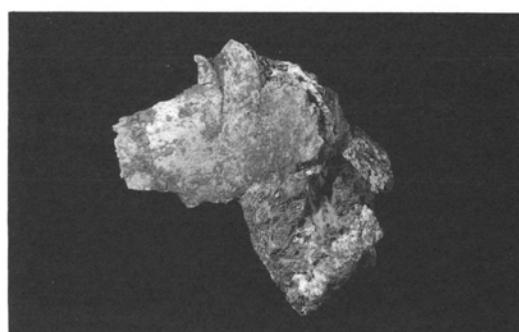
5 第5号火葬墓 四肢骨片か？



6 第5号火葬墓 椎骨か？

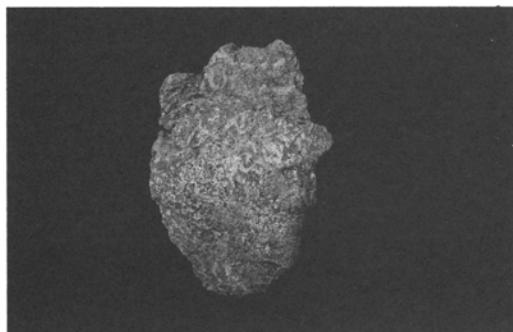


7 第5号火葬墓 四肢骨

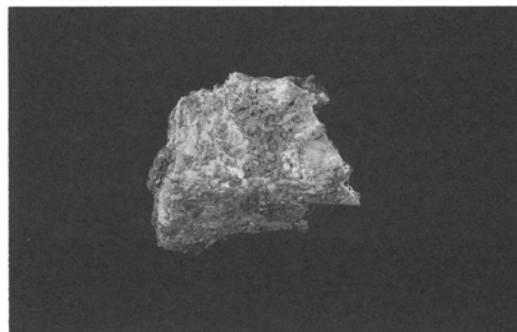


8 第5号火葬墓 寛骨か？

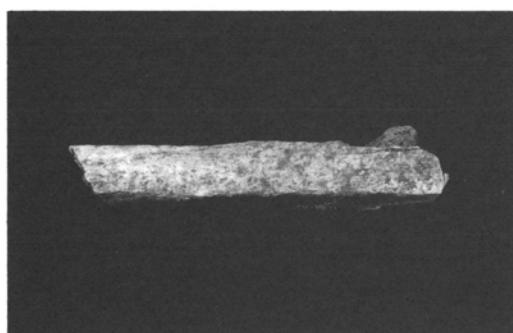
第8図版



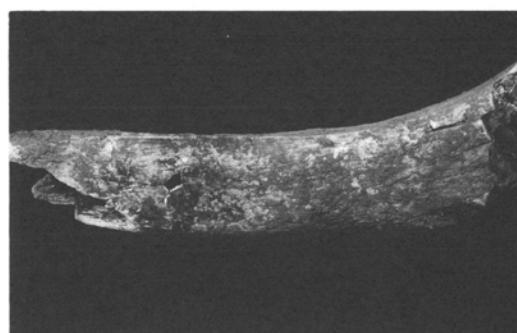
1 第5号火葬墓 上腕骨頭



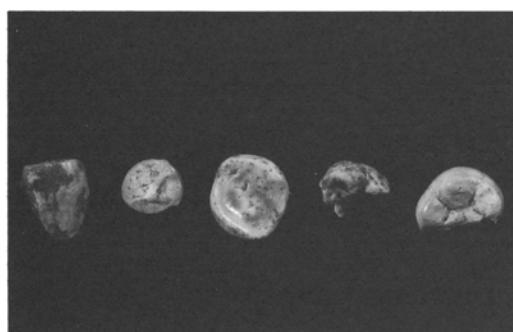
2 第5号火葬墓 上腕骨か？



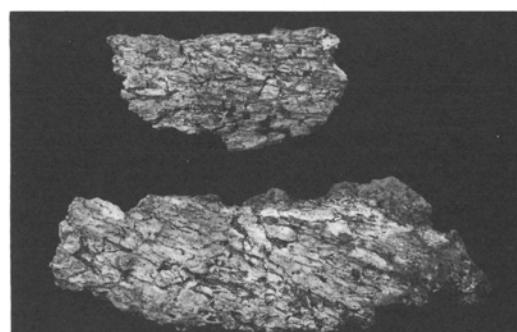
3 第5号火葬墓 四肢骨片



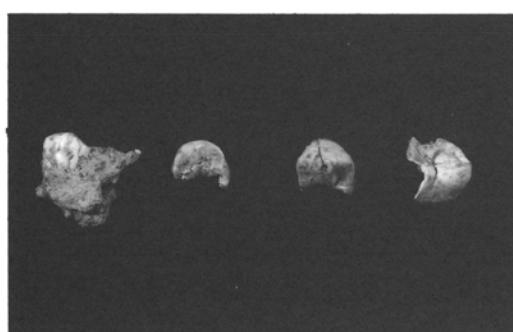
4 第5号火葬墓 上腕骨



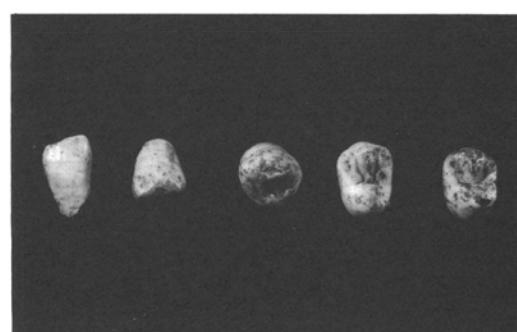
5 第1号土壤墓 齒冠部



6 第1号土壤墓 四肢骨



7 第2号土壤墓 齒冠部



8 BK14グリッド 齒